

## 論 文 要 旨

報告番号 甲 ・ 乙	第 号	氏 名	柚木 純二
<p>[ 論文題名 ] Clinical experience with the RELAY NBS PLUS stent-graft for aortic arch pathology.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Surgery Today、44、2263-2268、2014</p> <p>著者名 柚木純二、倉谷 徹、白川幸俊、鳥飼 慶、島村和男、金 啓和、澤 芳樹</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>(目的)弓部大動脈病変に対するステントグラフト治療はその適応拡大により、急峻な大動脈弓での <b>sealing</b> を要する症例をしばしば経験する。しかし、現在承認されている企業性デバイスでは急峻な大動脈弓に対応できず、<b>bird-beak</b> の形成や不十分な <b>sealing</b> による遠隔期の合併症が懸念される。このような病変への未承認次世代デバイス RELAY NBS PLUS の安全性と有効性を検討した。</p> <p>(対象)2010年7月から2011年12月までに、弓部大動脈病変に対し RELAY NBS PLUS を使用した 13 例(男性 8 例, 平均年齢 59.8 歳、29-78 歳)を対象とした。頸部バイパスを 11 例(84.6%)に併施した。</p> <p>(結果)手術関連死亡や重篤な合併症はなかった。退院前の造影 CT にて明らかなエンドリークを認めず、手技成功率は 100%であった。大動脈弓小弯側半径は平均 16.2mm と小さく、2 例の <b>bird-beak</b> 症例はいずれも小弯側半径が 15mm 以下のかかなり急峻な大動脈弓であった。平均追跡期間は 22.1 ヶ月で、大動脈関連合併症は認めなかった。</p> <p>(結語)弓部大動脈病変に対する RELAY NBS PLUS stent-graft は、既存承認デバイスでは対応不可能な大動脈弓病変であっても、安全かつ有効に留置可能で中期成績も良好であった。しかし、これらの成績を確証するためには、より大規模で長期的な study が必要である。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	高島 毅
<p>[ 論文題名 ] Significance of technetium-99m human serum albumin diethylenetriamine pentaacetic acid scintigraphy in patients with nephrotic syndrome.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Plos one, 10 (4): e0123036. doi: 10.1371/journal.pone.0123036, Apr 10, 2015.</p> <p>著者名 Tsuyoshi Takashima, Tomoya Kishi, Koji Onozawa, Shuichi Rikitake, Motoaki Miyazono, Takateru Otsuka, Hiroyuki Irie, Ryuichi Iwakiri, Kazuma Fujimoto and Yuji Ikeda.</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【目的】</b> ネフローゼ症候群(NS)では糸球体を透過した大量のアルブミンが近位尿細管で再吸収・異化されると考えられており、最終的な尿蛋白量が糸球体からの蛋白漏出量を反映していない可能性がある。以前、我々は尿蛋白が NS レベルではないが、腎生検で NS に準じた病態で低蛋白血症を呈したと考えられた症例を報告したが、蛋白漏出性胃腸症の除外のため<sup>99m</sup>Tc-HSADによる蛋白漏出シンチグラフィを施行した所、24時間後の前面像で肝より腎に強いびまん性陽性集積を認めた。健常成人に<sup>99m</sup>Tc-HSADを静脈内投与するとアルブミン代謝とほぼ同じ動態をとり、24時間後の臓器放射能は肝腎共に同程度とされる。今回この所見がNSに特徴的であるかを検討した。</p> <p><b>【方法】</b> 佐賀大学での本シンチ施行例をNS群10例、非NS群7例に群別した。 Method1:<sup>99m</sup>Tc-HSAD投与24時間後の前面像で、肝より腎に強い陽性集積を呈するものをDense Kidney(+)、肝腎同程度を(±)、腎より肝に強いものを(-)と定義した。 Method2:<sup>99m</sup>Tc-HSAD投与24時間後の前面および後面像で左右腎と肝の関心領域を設定し、肝に対する左右腎のカウント比(K/L)を計算した。</p> <p><b>【結果】</b> Method1:NS群9例でDense Kidney(+)を認めるも、非NS群では1例も認めなかった。 Method2:前面および後面像での左右腎のK/Lはいずれも、NS群は非NS群に比し有意に高値であった。</p> <p><b>【考察・結論】</b> Dense KidneyはNSに特徴的な所見であり、尿細管でのアルブミン再吸収を反映して尿蛋白量がNSレベルにない症例をNSに準じた病態と診断するための補助的検査になりうる可能性が示唆された。</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏 名	高瀬 幸徳
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Magnetic Resonance Evaluation of Cerebellar Damage after Microvascular Decompression Surgery for Trigeminal Neuralgia: Special Reference to the Effects of Superior Petrosal Vein Sacrifice and Cerebellar Compression with a Spatula</p> <p>JSM Neurosurgery and Spine, 2, 5, 1039-1044, 2014</p> <p>Yukinori Takase, Masatou Kawashima, Toshio Matsushima, Jun Masuoka, Yukiko Nakahara, Kohei Inoue</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>&lt;研究の目的&gt;後頭蓋窩の手術において、上錐体静脈を切断した場合に術後小脳腫脹をきたし臨床問題となることがある。元々上錐体静脈枝の圧迫や捻れが少ない三叉神経痛患者において、神経血管減圧術中に上錐体静脈枝を切断した場合の MR 画像所見の検討を行った。</p> <p>&lt;方法&gt;三叉神経痛に対する神経血管減圧術を施行した 34 例について、術後 3 日以内に撮像した MR 画像所見を検討した。また、上錐体静脈枝を 4 群に分け、術中に切断した群数、顕微鏡操作時間、症状との関連を調べた。</p> <p>&lt;結果&gt;少なくとも 1 つの群の上錐体静脈枝を切断した症例は 30 例であった。拡散強調画像(DWI)及び fluid-attenuated inversion recovery 画像(FLAIR)の両方で異常を呈した症例は 6 例(17.6%)で、症候性合併症を生じた 3 例全例が含まれていた。FLAIR のみの異常は 17 例(50%)、DWI のみの異常は無く、いずれでも異常が無かった症例は 11 例(32.4%)であった。MR 異常の頻度と切断した群数、顕微鏡操作時間との関連は無かった。</p> <p>&lt;考察&gt;MR 異常所見の成因として脳ベラ牽引による挫傷や静脈鬱血等があるが、切断した群数との関連は無かった。温存できた症例でも MR 異常は出現しており、脳ベラ牽引も一因と考えられる。</p> <p>&lt;結論&gt;MR 異常所見は比較的高頻度に見られるものの、上錐体静脈枝の切断は大きな症候性合併症無く行い得る。</p>				
<p>備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。</p> <p>2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。</p>				

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	伊藤 学
<p>[ 論文題名 ]  Scaffold-free tubular tissues created by a Bio-3D printer undergo remodeling and endothelialization when implanted in rat aortae.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年  PLoS One, 10(9), e0136681, 2015</p> <p>著者名  <u>Manabu Itoh</u>, Koichi Nakayama, Ryo Noguchi, Keiji Kamohara, Kojiro Furukawa, Kazuyoshi Uchihashi, Shuji Toda, Jun-ichi Oyama, Koichi Node, Shigeki Morita</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>Background</b>  Small caliber vascular prostheses are not clinically available because synthetic vascular prostheses lack endothelial cells which modulate platelet activation, leukocyte adhesion, thrombosis, and the regulation of vasomotor tone by the production of vasoactive substances. We developed a novel method to create scaffold-free tubular tissue from multicellular spheroids (MCS) using a “Bio-3D printer”-based system. This system enables the creation of pre-designed three-dimensional structures using a computer controlled robotics system. With this system, we created a tubular structure and studied its biological features.</p> <p><b>Methods and results</b>  Using a “Bio-3D printer,” we made scaffold-free tubular tissues (inner diameter of 1.5 mm) from a total of 500 MCSs (<math>2.5 \times 10^4</math> cells per one MCS) composed of human umbilical vein endothelial cells (40%), human aortic smooth muscle cells (10%), and normal human dermal fibroblasts (50%). The tubular tissues were cultured in a perfusion system and implanted into the abdominal aortas of F344 nude rats. We assessed the flow by ultrasonography and performed histological examinations on the second (n=5) and fifth (n=5) day after implantation. All grafts were patent and remodeling of the tubular tissues (enlargement of the lumen area and thinning of the wall) was observed. A layer of endothelial cells was confirmed five days after implantation.</p> <p><b>Conclusions</b>  The scaffold-free tubular tissues made of MCS using a Bio-3D printer underwent remodeling and endothelialization. Further studies are warranted to elucidate the underlying mechanism of endothelialization and its function, as well as the long-term results.</p>			

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	永田 尚義
<p>[ 論文題名 ]  <b>High-dose barium impaction therapy for the recurrence of colonic diverticular bleeding: a randomized controlled trial.</b></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  <b>Annals of Surgery. 261(2), 269-75, 2015</b></p> <p>著者名  永田 尚義、新倉量太、新保卓郎、石塚直樹、山野和義、水口京子、秋山純一、柳瀬幹夫、溝上雅史、上村直実</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>目的:</b> 大腸憩室出血の再発予防を目的とした有効な治療法は確立されていない。高濃度バリウム充填療法の再発予防効果をランダム化比較試験において検証する。</p> <p><b>方法:</b> 対象は、無痛性の血便で入院した成人で、大腸憩室出血と診断され保存的止血が確認された患者である。バリウム充填療法群、保存治療群にランダム割り付けを行った。主要評価項目は再出血であり、副次的評価項目は期間中の輸血使用、内視鏡検査回数、入院回数、入院期間である。登録後、患者は少なくとも1年間の <b>follow-up</b> を行った。</p> <p><b>結果:</b> 観察期間中央値は 36.3 カ月。期間内に死亡、血管内治療、外科手術例はいなかった。1年後の再出血率は、保存群 42.5%に比べて、バリウム群 14.8%で有意に少なかった (<math>p=0.04</math>, log-rank test)。バリウム治療における重篤な合併症は認めなかった。観察期間中、保存群に比べてバリウム群では、有意に輸血使用回数および使用量が少なく、内視鏡検査回数が少なく、入院回数および日数が少なかった。</p> <p><b>考察:</b> 大腸憩室出血診療における世界で初めてのランダム比較試験である。単施設の結果であり、今後、多施設での有効性、安全性の検証が必要である。</p> <p><b>結論:</b> 大腸憩室出血で入院し、保存治療で止血が確認できた症例において、高濃度バリウム充填療法は再出血を予防する有効な治療法である。また、再発を抑制することで退院後の輸血使用、再入院、検査を減らすことが可能である。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	福森 則男
<p>[ 論文題名 ]</p> <p><b>Association between hand-grip strength and depressive symptoms: Locomotive Syndrome and Health Outcomes in Aizu Cohort Study (LOHAS).</b></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 age and ageing, 44 (4), 592-598, 2015.</p> <p>著者名 Fukumori Norio, Yamamoto Yosuke, Takegami Misa, Yamazaki Shin, Onishi Yoshihiro, Sekiguchi Miho, Otani, Koji, Konno Shin-ichi, Kikuchi Shin-ichi and Fukuhara Shunichi.</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>握力の強さとうつ症状の有病および1年後の新規発症との関連について, 横断的および縦断的に解析した.</p> <p>2008年~2010年にかけて福島県山間部の2自治体に居住する40歳以上の一般住民を対象に, 運動機能調査と自記式質問紙, 特定健診データを用いたコホート研究をおこなった. 運動機能は, 握力, 歩行速度 (Time Up and Go), 片足立ち時間を測定した. 調査票には, 健康関連 QOL 尺度である SF-36, 性, 年齢, 併存疾患の有無, 腰痛の有無, 頸部痛の有無を含めた. 測定された握力値は, 性・年齢別の国民平均値をもとに標準化して解析に用いた. うつ症状の有無は, Mental Health Inventory (MHI-5)を用いて測定した.</p> <p>4,314名 (平均年齢 66.3歳, 女性 58.5%) が解析対象となった. 横断的解析では, 標準化握力値が1SD低くなる毎のうつ症状の有病調整オッズ比は 1.15 (95%CI 0.06-1.24)であった. 1年後のうつ症状の有病調整オッズ比は, 1.13 (95%CI 1.01-1.27)であった. 握力値を4分位に分けて傾向性について検討したところ, 横断的解析, 縦断的解析いずれにおいても, 握力が弱くなるにつれてうつ症状の有病オッズ比が高くなる傾向を示した.</p> <p>握力は簡便に測定できる手技であり, うつ症状の存在や新規発症を予測することに役立つ可能性があることが示唆された.</p>				
<p>備考 1 論文要旨は, 600字以内にまとめるものとする.</p> <p>2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること.</p>				

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・㉔	第 号	氏 名	多胡 雅毅
<p>[ 論文題名 ]</p> <p><b>Excessive Sweating is a Predictive Factor for Serious Consequences of Rhabdomyolysis Not Requiring Renal Replacement Therapies on Admission.</b>                  (多汗は入院時に腎代替療法を必要としない横紋筋融解症の重症化の予測因子である)</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年  <b>General Medicine: Open Access, 3(5), 210, 2015</b></p> <p>著者名  <b>Masaki Tago, Naoko E Furukawa, Yuka Naito, Norio Fukumori, Takashi Sugioka and Shu-ichi Yamashita</b></p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【目的】</b>横紋筋融解症は重篤な転帰をたどりうる病態であり、その予後予測因子について検討を行った。</p> <p><b>【方法】</b>2006~2013年の8年間に佐賀大学医学部附属病院総合診療部に入院した患者のうち、クレアチンキナーゼ (CK) 上昇があり臨床的に横紋筋融解症が疑われ、入院時に透析の適応とならなかった患者について、後ろ向きにカルテレビューを行い、血液検査、バイタルサイン、身体所見などのデータを抽出した。入院中に死亡または透析導入の転帰をたどった患者群 (Group A) とそれ以外 (Group B) の2群に分けて比較を行った。</p> <p><b>【結果】</b>計53名の患者が対象となった (男性 60.4%、平均年齢 58.6歳)。Group Aには5名の患者が該当した。単変量解析において、入院時の過度の発汗のみが有意に重篤な転帰と関連していた。(odds ratio 31.33, 95% confidence interval 2.17-450.07, p&lt;0.05)</p> <p><b>【考察】</b>発汗の評価は、検査設備の整わない施設でも容易に行うことができる診察であり、予後予測因子として有用であると考えられる。発汗と重篤な転帰との関連については、悪性症候群や自律神経系の異常、脱水などが関連している可能性があるが、それらの関与は本研究では明らかとならなかった。</p> <p><b>【結論】</b>発汗は入院時に透析を必要としない横紋筋融解症患者の予後予測因子である可能性が示唆された。</p>			

- 備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。
- 2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	内藤 優香
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Extracurricular classes of English for medical purposes promote confidence in undergraduate medical students</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>Journal of Medical English Education, 14(3), 93-98, 2015</p> <p>著者名</p> <p>Yuka Naito, Naoko E. Furukawa, Masaki Tago, Norio Fukumori, Shu-ichi Yamashita</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【目的】各大学で医学生全体の医学英語に対する興味・関心とスキルの底上げを期待した取り組みがなされているが、その効果について検討されているものは少ない。本研究では当科で実施している医学生に対する課外活動としての医学英語教育講座への参加回数と医学英語への興味、自信への相関があるか検討をした。</p> <p>【方法】当科では医学生を対象に EMP (English for Medical Purposes) という英語による臨床推論を、週に1回放課後に行っている。平成26年12月に佐賀大学医学部5、6年生を対象に、医学英語に対する興味、自信の程度を調査した。EMPの参加回数と、英語圏への留学・国際学会への参加・英語論文検索/執筆・国際医師免許取得・外国人患者/医師/学生とのコミュニケーション・英語でのプレゼンテーションに対する興味と自信の程度について、それぞれ5段階方式(全く興味がない/全くできないを1、大変興味がある/ほぼできるを5)で質問し、EMP参加回数が0-1回、2-5回、6回以上の3群に分け、傾向性の検定を用いて比較した。</p> <p>【結果】118名の回答を得、3群間で国際医師免許の取得、外国人患者/外国人医師/外国人学生とのコミュニケーション、英語のプレゼンテーションへの自信に関する質問で有意差を認めた。</p> <p>【考察】臨床推論を英語で双方向性にディスカッションする形式の課外教育活動であるEMPへの参加回数が多いほど、コミュニケーションやプレゼンテーションを行うことへの自信は向上する。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。